

朝鮮美術の精華—絵画と工芸—展によせて

韓時覚「布袋図」(当館蔵)をめぐって

江戸時代には、朝鮮王朝から派遣された外交使節団である「朝鮮通信使」が、慶長12年(1607)から文化8年(1811)までの間、12回にわたって日本を訪れました。使節団には、画家(画員)が必ず随行しました。彼等の役割は、現地の景観などの視覚記録の作成のみならず、宴席などで画を描き、両国の文化交流を促すことでした。本稿では、画員として日本を訪れた朝鮮画家の一人である、韓時覚(1621~?)をご紹介します。

韓時覚は、字は子裕、雪灘と號しました。父の代から宮廷の図画署の画員として務め、減筆体の故事人物や花鳥、着色の肖像画など、様々な作品が残されています。第17代孝宗の治世である1655年(孝宗6年/明暦元年)に実施された第6回通信使に随行して日本を訪れ、朝岡興禎「古画備考」の「朝鮮書画伝」では、「韓時覚」と「金雪灘」の二項で紹介されています。優れた画家として、日本でも人気を博したようです。

当館が所蔵する韓時覚「布袋

図」(図1)は、流麗な墨線と墨の濃淡を巧みに用いて、布袋とされる僧侶風の人物が即興的に描かれています。人物は、にこにこ笑んで、向かって左の手を耳元にあてるような仕草をしており、どこか風狂な雰囲気漂います。人物の右下には、韓時覚の自款「雪灘」及び白文鼎印が捺され、画面上部には、日本の臨濟僧である祥山宗瑞(1619~94)の賛が附されます。

本図は、作品名を布袋とされてきましたが、画中にそうした明記はなく、付属資料もなく、いつから布袋図とみなすようになったか詳らかではありません。画中の人物は、胸元の開いたゆったりとした衣をまとい、親しみ深い笑みをたたえるなど、その姿は、たしかに伝統的な布袋像を思わせます。

実は、本図は唐時代の禅僧・普化(ふけ)を描いたものである可能性が指摘されてきました。まずは祥山宗瑞の画賛で、「画図一箇村僧。姓名更無人知。手中只持鈴鐸。不普化又是誰。」(この画は一人の村僧を描いている。姓名は誰も知らない。手中にはただ鈴鐸を持っている。普化でないなら、誰なのだろうか)と述べています。普化は数々の奇行で知られる風狂の禅僧で、夜は墓場に

住み、昼は街に出て鈴を振り、人々と問答したといわれます。彼がシンボルともいえる鈴を振る「普化振鈴」は、画題にもなりました。ここで本図を見ると、この人物は向かって左の手に、黒く、下部が丸みを帯びた物体の、柄の部分握っているように見えます(図2)。近年の研究で、その形状から、祥山宗瑞はこれを鈴鐸とみたのではとの見解があります。

ここで、韓時覚の描いたその他の布袋図を見てみましょう。彼が通信使として来日した際に描いた布袋図が数点伝わり、高麗美術館蔵「布袋和尚図」(図3。部分図)、幽玄齋蔵「布袋図」(図4)は、いずれも即興的な筆で、手前の大袋に寄りかかって眠る布袋の姿を表します。これらの布袋は、たしかに面貌など、当館蔵「布袋図」と近似するところもあります。また「布袋人物図」(図5。部分図。潤松美術館蔵)は、当館蔵本とほぼ同じポーズをしている点が注目されます。立ち姿で画面左方向を向き、向かって左の手を耳元に持ってきており、背後に大きな袋が描かれていることから、それが袋の口を握る手だとわかります。いっぽう当館蔵本は、奇妙なことに、ポーズは同じであるものの、布袋のシンボルともいえる大きな袋が描かれていません。向かって左手に握る黒い物体を、袋の口の表現とみなし、その左上にひかれた曲線を袋の輪郭として、じつは布袋の背後に、表現上は省略された大袋があると考えることもできますが、布袋で

あれば、ほぼ同じ構図の潤松美術館本のように、背後の袋も表すのではないのでしょうか。手にする黒い物体の形状から鑑みても、確かにこれは鈴鐸と考えるほうが自然であり、したがって、やはり普化を描いたものである可能性が高いかもしれません。

韓時覚が来日した際に描いた作品には、現在布袋が多く残りますが、彼等通信使を接待し、しばしば交流を持ったのが、五山の臨濟僧達でした。普化もまた、臨濟僧が好む画題に違はなく、彼等の求めに応じて、「普化振鈴」の画題を描くこともあったかもしれません。ただ祥山宗瑞は、賛において「不普化又是誰」と、必ずしもこの画の人物を普化とみなしていません。言葉通りにとれば、賛者にとっても、この画中人物は何者か同定し難かったこととなります。やはり本図が描かれたいささかは不明ですが、祥山宗瑞にとっては、画の中の人が普化か、はたまたそれ以外の誰かを同定するなど意味なきことで、所詮は幻身、では何者といえようかと、むしろ鑑賞者に禅的な問いかけを行っているのかもしれない。(都甲さやか)

※図3は「朝鮮王朝の絵画と日本」展図録、静岡県立美術館等、2008年。図4は「幽玄齋選 韓国古書画図録」幽玄齋、1996年。図5は劉復烈編「韓国絵画大観」文教院、1969年より抜粋しました。



図1



図2



図3



図4



図5

季刊 美のたより No.218

令和4年4月1日

発行 大和文華館